

地域交流 センター通信 vol. 05

巻頭言：地域交流研究センターは
ソローの大学のように

特集 1

地域活動と それを支える人びと

特集 2

まちづくりの活動と大学 地域の声／トピックス

都留文科大学 地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

私

はもし、都留文科大学に長く勤務しなかつたら、地域交流の有り難さを知るようにならなかつたはずです。かつて私は理系の研究者の輪の中にいて、何の不思議も感じませんでした。その私が、人間探究の研究者と知りあい、都留市にムササビの保護を提案したことから、多くが反対だった地域の人たちと真剣に話し合う機会を何百回と持ちました。そして、私は、ムササビの保護に反対する人たちのなかに多くの友人をえるという、よき経験をしました。

私は地域の友人から、山仕事を教わり、山小屋をいっしょに建て、そして、水場のありかや山道の世話の仕方を教わりました。それに私は神社の境内で遊ぶ子どもの友人から、ムササビの滑空コースを教わりました。その滑空コースは、私が予測しえない方向をとっていて、思いがけない発見につながりました。こうして地域の人たちから教わった《森のくらしの技と知恵》は、どれも、スマートで、役に立ち、教訓に満ちていました。

私は、学会にでかけて研究者に会うより、地域のひととの会話の方が知的で、哲学的であり、役に立つ、と知りました。それに語らいが、健康的で、楽しかったのです。人々が伝える《森のくらしの技と知恵》とは、地域の文化で

地域交流研究センターは ソローの大学の のよう

今泉吉晴

『ウォールデン』初版本扉より。
ソローの妹、ソフィアの絵



あると気づきました。

地域交流とは、同じ地域で行われる文化交流でした。そこで重要なのは、《森のくらしの技と知恵》に象徴される地域の文化とは、いったいどのような性格の文化か、という問題です。それはかつて、里山とつながる農業が生きていた時代の、本来のエコロジー社会の有り様を伝える文化であつて、未来を開く人間のな力を持つ文化であるでしょう。

こうして私の動物学研究は、おおいにはかどりましたが、問題もありました。実地の作業があまりに楽しく、それゆえ忙しく、論文にまとめる時間が惜しくなりました。それに、多くの自然研究と違って、既存の科学の表現方法ではまとめるのが難しい、という別の困難もありました。

私は、内外の科学論を読みはしましたが、地域交流が研究に役立つとか、地域交流によって研究資料が得られる、などという科学論があるはずがなく、答えをみいだせませんでした。いつの間にか、私は、地域交流から生まれた疑問を世界に問う、という自然な行為をしていたのです。

やがて私は、翻訳で読む限りでは違和感があつて読めなかつた、アメリカのナチュラルリスト、アーネスト・トンプソン・シートン（一八六〇〜

地域交流は、文化交流

先行文化との交流が、
新しい時代を切り開く

地域の環境文化との交流こそ、
本当の環境教育

地域に生きる人々は、
みな詩人です

一九四六)の『動物記』のよさが分る自分に気付きました。私はシートンの本を夢中になって読み、シートンの著作物と絵の全てが座右の書になりました。

一〇〇年ほど前の北アメリカ大陸で活躍したシートンこそ、地域が育んだ『森のくらしの技と知恵』を持つ、人間形成にとつての文化的な意味に世界で最初に気付いた人でした(シートンは『森のくらしの技と知恵』をウッドクラフトと呼んでいます)。シートン動物記は、ウッドクラフトを伝える手段として、「四歳から九四歳までの子どもの心を持つ人たち」に向けて書かれています。私は、地域交流の経験から、これまでの日本語訳は、シートンの意図を無視して訳されており、訳しなおすことが必要である、と気付い

たのです。私は地域交流の意味を、シートンがウッドクラフトを後生に伝えようとした姿勢のなかに、確かな手ごたえをもって学びました。

私は、シートンの考えをもっと伝えようと、初めて自分からすすんで本を出版する企画を立て、シートンの評伝『シートン』^{*}を書きました。私は研究の成果を、子どもの本として出版する主義になっていました。

シートンは、自然のなかに溶け込んでくらすアメリカ先住民の『森のくらしの技と知恵』に、自然と共生する考え方と技があることに注目しました。そして、先住民の権利の守り手になると同時に、子どもに『森のくらしの技と知恵』を伝える世界最初の子どもの環境教育団体「ウッドクラフト・インディアンズ」を一九〇二年に結成して、その相談役(指導者ではありません)になっていきます。一九一〇年ごろ、ウッドクラフト・インディアンズは会員数おおよそ二〇万人の世界最大の子ども団体に育っています。

なかつた苦い経験があります。ソローの思想は、日本には、ロビン・ウィリアムズ主演の映画『今を生きる』(Dead Poet Society・1989年)で伝わったといった方がいらいです。

私はこうして、シートンと知り合ったことを介して、学生時代に読めなかったソローの『ウォールデン 森の生活』に戻っていました。私は、『ウォールデン』を訳すことにしました。^{*}

ソローは、こう書いています。
「大学で、いかに優れた歴史学、哲学、詩学の研究をしようと、いかに優れた会の会員になろうと、私たちが何でも知りたいと常に周囲に気を配る習慣を持つことに比べたら、たいしたことではありません」

ソローは、ライシリアム運動^{*}の担い手として、コンコード^{*}で講演活動を組織する社会教育活動のボランティア担当者となり、また、自分でも講演をしたことから、『ウォールデン 森の生活』をコンコードの人々に向かって書く着想を得ています。

そして、こう提案しています。
「今こそ私たちは、初等教育の学校ではない大人の学校を持つべきです。それには、村がそのまま大学になればいいのです。年長の村民は、みな大学構成員になり、余暇をその活動にあてます。人生のすべてを哲学の研究にさ



さげます。……コンコードに学生を下宿させ、この町の空の下で哲学の研究に励んでもらいましょう。気鋭の哲学者アラバールを招いて、講議に耳を傾けようではありませんか。……招いた世界の賢者には、当地で暮らすための費用に加えて、賄い付きの下宿の世話も、もちろんします」

都留市の住民と都留文科大学の構成員で、ソローのいう大学とは、都留文科大学のよう、いや、都留文科大学がソローの大学のようであつたらいい、と思わぬ人はいないでしょう。

私の地域交流は今や、シートンからソローにつながり、ライシリアム運動にもつながっている、と自覚しています。そして、地域交流研究センターは、ソローの大学のようであつたら素晴らしい、と考えるようになっていきます。

いまいずみよしはる 地域交流研究センター長

- *1 『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』 福音館書店、2002
- *2 『森の生活』 神吉三郎訳、岩波書店、1954
- *3 『ウォールデン 森の生活』 小学館、2004
- *4 講演活動を中心とした文化運動
- *5 ポストンの北西三〇キロの村、当時、人口二〇〇〇人。

特集1 地域活動とそれを支える人びと

ムササビ観察会の様子



地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム研究では学芸員を、「フィールドにおける一芸に秀でた人」と定義しています。特集1では、そんな学芸員の一人である小口尚良さん（谷村第二小学校教諭）が取り組む地域活動を紹介します。

身近な自然の魅力を伝える

一九八九年、都留文科大学の動物学研究室の学生と市民とが中心となり、生き生きとした身近な自然を楽しめる地域の魅力を評価しようというフィールド・ミュージアムをつくる取り組みが始まっています（この構想を現実のものとするための組織として「ムリネモ協議会」がつけられました。「ムリネモ」とは、身近な野生動物でもあるムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったものです。活動の詳細については、地域交流センター通信二号を参照してください）。

「うら山観察会」は、都留の身近な自然の魅力を地域の子どもたちに伝えたい、という目的で、当時のフィールド・ミュージアム構想の教育部門として小口尚良さんがこの組織の運営を担当しました。そのほとんどが卒業生と市民で、およそ一〇名でスタートしました。いまでもこの活動は、都留文科大学の学生と市民が中心となり、つづけられています。活動を始めてから一五年。途中、メンバーが少なくなったり、活動内容が曖昧になったりとさまざまな困難がありながらよくここまでつづいたものだと小口さんは振り返ります。

活動が持続した要因

活動がここまでつづいた大きな要因の一つに、子どもたちの素直な反応があるようです。たとえば、ムササビの滑空を観て感動の声を子どもたちがあげたときなど、自然のすばらしさに子どもたちが気づいてくれたのがわかり嬉しいと小口さんは言います。もちろん、反応が悪いとむなしさが残りますが、そこ



小口尚良（おぐちひさよし）さん

1963年： 島根県生まれ
 1986年： 都留文科大学卒業。動物学研究室で「人間の自然観」をテーマに取り組む
 1988年： 山梨県大月市瀬戸小学校勤務
 1989年： 「ムリネモ協議会」発足と同時に「うら山観察会」を担当する
 1996年： 都留文科大学裏の大桑山に観察の拠点となるプレハブを建てる
 1997年： 内地留学制度で都留文科大学大学院へ
 2002年： 谷村第二小学校教諭となる

森を育てる

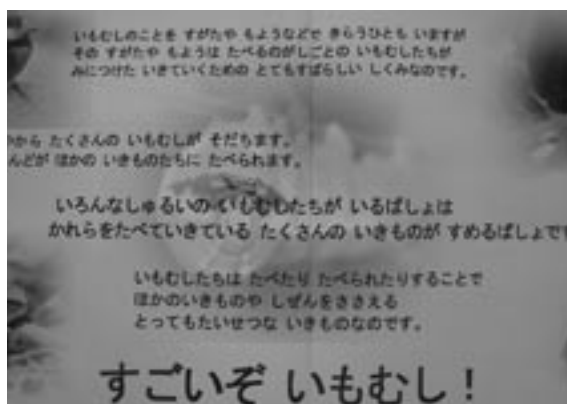
小口尚良さんが建てたプレハブの観察小屋。6畳ほどの空間ですが、ここが観察の拠点となります。しかし、建ててから年月が経過しているため、床などに傷みがでてきました。今年の最大の目標は小屋の改築です。観察小屋は、小口さんの大事な森との接点です。ここでは水源から水を引き、枝打ちなど木々の手入れをし、森を大切に育て、身近な動物たちとの出会いを楽しんでいます。ここでの体験は、子どもたちに伝えられ、観察会のプログラムにも活かされています。



森のなかに建てたプレハブの観察小屋

夢は

絵本をつくる。これは小口さんの長年の夢です。これまでに、いも虫をテーマにその魅力を写真で表現した「すごいぞいも虫」を私家版としてつくりました。手作りのこの絵本には、小口さんの森での観察の成果と身近な自然への愛情が込められています。ネズミもモグラもよく観察すればきっと好きになってくれるはず。これから生きいきとした身近な自然の面白さを伝えていきたい、というのが夢です。次回作も、「ぼくをさがしに」というタイトルで構想中です。



手作りの絵本

での反省も次の観察会をよりよいものにしていく原動力となります。

つぎの要因として行政との協力があります。都留市からはいまでもうら山観察会に講師代としての助成があります。この助成金は、会の運営費として有効に使われてきました。いかに地域の市民活動として根付かせていくか。それには、行政との協力体制が欠かせません。

うら山観察会の特徴は、活動の中心を学生が担っているということでしょう。都留市は全国から学生が集まります。大学内でも新入生向けに会の活動紹介がなされるなど知名度もあり、毎年、関心のある学生が会の活動に加わります。楽しければいい、といったサークル的な活動ではなく、あくまで市民活動というスタンスを崩さない。そのために、毎年、うら山観察会の目的などが確認され活動が引き継がれてきました。こうしたことも、会の活動が継続してきた大きな要因でしょう。いまでは二〇名ほどの学生が活動に参加し、一〇〇名の一般会員がいます。

「人間が変われば、地域も変わる」

小口さんは、いまでも会の一員として学生、市民のみなさんとともに活動をつづけています。子どもたちの関心、市民との関わり、学生の運営のあり方などさまざまな要素を視野に入れながら、より質が高い、身近な自然を楽しむ観察会を開催していきたい、といいます。「人間が変われば、地域も変わる」。これまで観察会がつづいてきた大きな意味がこの小口さんの言葉に込められています。



大学の特徴を活かした「うら山観察会」

太田藍乃

活動内容

都留市には身近に豊かな自然があります。わたしたちのすぐそばに生きいきとした魅力あふれる自然がある、ということを地域の子どもたちとともに学び、伝えていこう、というのが「うら山観察会」です。学生や市内の教員が主体の市民団体です。

活動は、月に一度ほどのペースでおこなわれる観察会、週一回のミーティングで構成されています。

それぞれの観察会には、担当者と数名のスタッフが中心となつて観察会のプログラムをつくっていきます。よりよい観察会へと仕上げていくために、ほかのメンバーにも企画の概要を検討してもらいます。こうした話し合いを繰り返し続けて観察会はつくられていきます。

観察会には、野ネズミやリス、ムササビなどの動物を対象とするもの、山を歩くことを楽しむものなどがあります。今年の観察会は、春の山の散策、初夏の植物を利用した染め物の観察会が行われました。参加者は、春の森の楽しさを満喫し、あるいは葉の緑色から予想もつかない色に染まったハンカチに満足そうでした。このほかにも、会員（市内に1〇〇名ほどいらつしやいます）になつている方に「うら山は動物ランド」という小冊子を配布していますし、市内の小学校対象に観察会の内容を説明する「うら山かべしんぶん」を制作しています。

「うら山観察会」のおもしろさ

都留市の自然を楽しめる、というのがこの活動のおもしろさの一つだとわたしはおもいます。森に行くのは好きだけれど日々の忙しさのなかでつい足が遠のいていたわたしにとって、子どもやスタッフとともに森に入り、そろそろホタルの季節だね、という話ができる場がある、というのは貴重です。みんな自然を楽しみたいという共通点があるので、他のスタッフや子どもたちの反応から学ぶことや発見す

ることが少なくありません。また、ここで学んだことが、都留市だけではなく、いつでもどこでも活用できるのもおもしろさの一つでしょう。

そして何よりもうれしいのは、地域の子どもたちやその親と交流できること。観察会の参加者の中心は地域の子どもたちです。子どもたちは、観察会に参加し、スタッフとともに楽しみなが身近な自然のおもしろさを学びます。ふだん大学にいてだけでは、こうした出会いはなかなかできません。観察会で仲良くなった子どもや親から地域の話を聞くことができるのはとても有意義なことだと実感しています。参加者のあいだの交流も、回を重ねるにしたがい深まっていきます。このような交流をこれからも大切にしていきたいとおもいます。森にかこまれた大学の特徴を活かした「うら山観察会」に、ぜひ遊びにいらしてください。

連絡先：urakan@edu.tsuru.ac.jp

〇都留市中央公民館 tel:0554-43-1451

おたあいの 本学初等教育学科三年

ムササビを好きになつた観察会

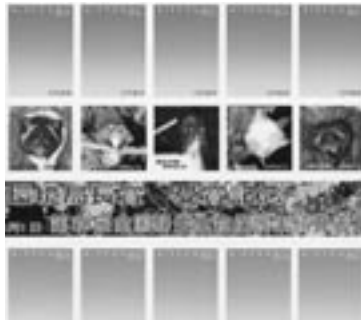
日向良和

小学生のころ、朝礼でムササビが話題になつたことがあります。そこでは、わたしが通っていた都留市立旭小学校のそばにある石船神社の「ムササビ問題」が取り上げられました。石船神社にはむかし

らムササビ（地元の人は「モモンガー」と呼んでいました）が住んでいましたが、周辺の宅地開発などで山から切り離された格好となり、森と行き来ができないうムササビが境内のご神木の樹皮を食べてしまふというものでした。そのため、ムササビを退治する話が持ち上がったのです。このとき、都留文科大学動物学教室のみなさんが地域の方々と解決策を探り、餌付けを始めました。さつそくわたしたちも石船神社でムササビの餌付けの作業を行いました。現在まで旭小学校の餌付け作業は一八年以上もつづいています。

いま考えると、わたしたちがしていた餌付けの作業には危険がたくさんありました。ドングリなどを入れる箱は、川に張り出した木に付けられていました。木登りをして食物を運ぶのですが命綱などはなく、足を滑らせたら下の川に落ちたのではないのでしょうか。わたしはそれほど運動神経がいい方ではなかったもので、いつも木登りには冷や汗をかいていたことを思い出します。

餌付けだけではムササビを嫌いになつていかもありません。しかし、観察会でムササビが滑空する場面を見ただけですぐにムササビが好きになりました。狭い境内のなかを数頭のムササビがつきつきに滑空します。観察会では、今泉吉晴先生をはじめ大学生たちといっしょに観察したことも忘れられ



ムササビのオリジナル写真切手

ません。だからわたしは、いまでもふと石船神社に立ち寄りムササビを眺めるのでしょうか。

*旭小学校でのムササビの保護活動は、二〇〇三年度環境省自然環境局長賞を受賞しました。この受

拡がる小口さんの活動

「うら山観察会」に参加した経験のある人は、都留文科大学の職員の中にも少なくありません。本学の図書館司書、小林啓子さんもその一人です。当時小学校三年生だった娘の由里奈さんとともに観察会に参加しました。啓子さんには、それまで子どもと大学生が交流する機会に参加したことはありませんでした。いっしょに森を歩き解説してくれる学生と子どもたちとの交流が新鮮な驚きとして印象に残っています。

賞を記念したオリジナル写真付き切手が発売されました。切手の写真には小口尚良さんの撮影したムササビが使用されています。（切手提供：小俣京子！
本学図書館勤務）

ひなたよしかず 本学図書館司書

由里奈さんも、参加した観察会の様子をはつきりと覚えていました。観察小屋のなかでじつと待っていると、やがてヒメネズミが小屋の壁の内と外をつなぐパイプを通して姿をみせました。はじめての体験でしたし、なによりじつくと本物のネズミを観察できたという感動はいまでもつよく心に残っています。

じつは、由里奈さんが小学校三年生のときの担任が小口尚良さんでした。チョウが羽化する瞬間やモグラの行動をビデオで撮影し、授業で見せてくれたこともありました。教室の子どもたちはその映像を観ていっせいに歓声をあげました。あるいは、週末に連れて行ってもらった観察小屋で遊んだことなども忘れられないといえます。一〇年以上経つたいまでもこうした体験と感動は鮮明に覚えているそうです。

大学で身近な自然について学び、それをもとに独自の生き方を実践してこられた小口尚良さん。彼の一貫した取り組み（ライフワーク）のなかで、地域に根ざした活動が生まれ、ながい時間をかけて育まれてきました。観察会に参加した多くの人々の心のなかにはその時の体験と感動がいまなお記憶に残り、会の活動を支えつづけているのです。



1993年の観察会の様子。
写真右が小林由里奈さん（写真提供：小林啓子）

地域の魅力を発見する

見方の変化をせまる 二つのしかけ

水谷衣里

はじめに

今年度、地域交流研究センター新規プロジェクトとして、学生の地域活動を支援し、地域社会からの問題発見と解決能力を高めるためのプロジェクト（以下、「Motto」学生地域活動支援プロジェクト）がスタートしました。そのプロジェクトのうち、二〇〇四年五月一八日に実施した、「現代社会の課題」での学生の地域活動紹介と、五月二二日に実施したまち歩き、「都留ツアー'04」について報告します。

「現代社会の課題」での活動紹介

「現代社会の課題」とは、社会学科一年生の必修の、正規の授業です。社会学科の数ある授業の中でも、教員のリレー講義とそれに対応するレポートの作成、共同研究発表で構成された極めて特徴的な科目内容となっています。

今回、Motto学生地域活動支援プロジェクトでは、この授業で活動紹介を行いました。テーマは「都留を楽しむ・その目のひらき方」。生まれ育った地域と都留を比較し、大学にとどまらない都留という地域の豊かさに気づいてもらうことをねらいとしました。

講義のなかでは、「うら山観察会」、「水と生きるまちプロジェクト実行委員会」の活動紹介を行いました。あたらしい生活が始まって僅か一ヶ月の新生にとつて、都留は未知の場所です。かつては同じ新生生だった先輩たちが、何を感じ、どう行動を起こしてきたかを学生自身の声で伝え、地域の魅力発見のためのきっかけを提供しました（そのときの新生生の感想の一部が九頁に掲載されています）。

都留ツアー'04

上記授業とのタイアップ企画として、「都留ツアー'04」を実施しました。今回のツアーの特徴は、①山梨魅力メッセセンサー講座、地域経済論ゼミ、地域社会学会、Motto学生地域活動支援プロジェクト

特集2 まちづくりの活動と大学

都留文科大学に社会学科が設立されて18年目に入りました。その間、講義やゼミ、フィールド活動、本格的に学生たちが担う「地域社会学会」活動（社会学科に基礎をもつ）などの蓄積のうえに、市民と学生たちの自主的な交流の場がさまざまに作られてきました。とくに近年は、学生たちによるまちづくりの取り組みがすすみ、地域住民との交流の可能性をひらいてきています。地域交流研究センターは、そうした地域交流と教育・研究との内的関連を見出していこうとしています（8～10頁）。

また、今年の秋には、念願の「都留文科大学前駅」（富士急行線）ができますが、地域交流の契機にしていこうと、大学としても提案を試みています（11頁に関連記事）。

「都留ツアー'04」での市民による解説（永寿院にて）



クトが共催で実施したこと、
②市民コメンテーターとして、地域の方に直接ポイントの解説をしていただいたことにあります。

ツアーのテーマは、「富士の湧水」としました。鶴水公園、田原の滝、十日市場の水掛畑、永寿院、普門寺での織物、三の丸発電所（当日は雨のため自由参加）をチェックポイントとし、ポイントごとに学生と市民が解説をしました。また地域経済論基礎ゼミ生は、それぞれの見どころを事前に調査してガイドマップを作成し、資料として配布しました。

当日は、少し雨が降る場面もありましたが、全体で三九名が参加する楽しいツアーとなりました。いつも歩いている道でも、見方を変えるだけで違う景色がみえてきたことや、まちの人にきくことで、見過ごしがちなその土地の背景や個性を改めて認識できたことなど、参加者にとつても運営側にとつても大きな収穫がありました。

以上の二つの企画は、自分が住むまちに対し興味をもってもらうことに主眼をおき実施しました。この試みは、第二弾として六月二九日（「現代社会の課題」と七月三日（都留ツアー'04）にも実施しました。

ふだん見ている光景は、そのままでは単なる風景にすぎません。そこから一步進んで、まちの魅力を肌で感じ、自分の目と耳で「見えない魅力」を発見する、そんな四年間にしていこうと入る口として二つの企画を位置づけました。「現代社会の課題」と都留ツアーを通じてまちを見る見方を変えていくようなものを提供するべく、今後

みずたにえり
本学社会学科卒業、東京都立大学大学院
地域交流研究センター・プロジェクトアシスタント

水と生きる・地域で生きる

みずまちの実践から

中村伸也

「水と生きるまちプロジェクト実行委員会」(以下みずまちと略記)は、都留の自然や地域を見直そうとはじまった学生団体です。

みずまちが大事にしていることは、自分たちの思いを地域でカタチにすることです。都留に溢れる豊かな水資源を中心テーマにし、地域で生活する学生が自分の住む地域をよく知り、自分たちが出来ることはなにか、カタチにしたいことは何かを考えながら活動を継続してきました。今年度で三年目を迎えます。

昨年度は、大学近くに位置する鶴水公園を舞台とした公園再生ワークショップを実施しました。大学が所在する楽山自治会と共催です。ワークショップとは、近年の住民参加のまちづくりでよく使われる手法ですが、本大学社会科学科では、「ワークショップ演習」として、おもに二年次の必修科目となっております。**みずまち**では、授業で知識として知ったワークショップを、学外の講習会や先進事例、書籍なども参考にして、メンバー同士で研究し実際の活動に生かしてきました。

公園再生プロジェクトでは、計五回のワークショップを実施しました。さらに公園を利用したイベント、楽山育成会の鶴水公園清掃や夏休みのラジオ体操などの自治会行事でのPR活動や意見交換会の開催、公園再生案発表会や懇談会の実施など、様々な手段を使って、地域の意見を反映した再生案作成に取り組んだのです。

活動の成果として、鶴水公園再生提案書と再生模型を都留市に提出しました。またこの活動は、地元紙に掲載され、財団法人・学生



模型を使っでの説明

学生たちによる地域活動ガイドンスの様子



サポートセンターの平成一五年度学生ボランティア団体支援としての表彰も受けました。学内ではじめて小さな活動が、徐々にではあるが地域社会に対して認知されつつあるといえるでしょう。

今年度は、**みずまち**では、実際の公園再生に取り組む計画です。ワークショップを通じて培ってきた信頼関係と公園再生案をベースにして、花植えや枝打ち、公園の中心となる池の清掃などの実際の公園整備、さらに参加者と公園をつなぐためのイベントの開催、自治会のイベントとのタイアップ企画などを考えています。また、月一回の割合で定期的な自治会の方々とも話し合いを持ち、相互交流意見交換を継続しています。

「都留市の水を大事にするなにかを始めよう」という模索から始まった**みずまち**の取り組みは、学科の奨励金制度、大学後援会のバックアップ、自治会の協力、外部資源の活用など、さまざまなものを通じて、ますます活発になろうとしています。今後も**みずまち**の活動を通じて、学生が地域で生活するということを、更に深く考えていこうとおもいます。

なかむらしんや 本学社会科学科三年

学生たちによる地域活動ガイドンス(八頁参照)の感想

自分も何かをしてみたい

「独自の活動があつて、都留文科大学はおもしろいと再確認しました。」「いろいろな方法で地域に入っていくとうとする学生がいることが分かった。ぼくも都留に住む都留市民の一人として、都留を知り、都留を良くしていきたいと思つた。」

都留の生活を楽しみたい

「私たちが都留で生活するのに、さまざまな支援があることを知っておどろいた。都留の生活を自分自身で楽しくしようという気がおきた。」「どの活動もとてもユニークなものばかり。無いものねだりから在るものさがしへ、と誰かが言っていたが、わたしもその考え方でいきたい。」

まちづくり市民活動と 都留文科大学の関わり

千葉立也

本学がある都留市は、豊かな自然に恵まれ、織物のまちとして栄えた伝統をもっています。まわりは山ばかりだと侮ってはなりません。いきいきと楽しく働くことができ、心の豊かさが感じられるまちにしようとする自発的に行動する市民の意思や意欲も、なかなかのものとして蓄えられています。

都留におけるまちづくり市民活動

大学の公開講座を契機に二〇〇〇年二月に立ち上がった「都留まちづくりネットワーク」(つるまちネット)は、当時、社会学科教員であった中村陽一氏が結び目になりましたが、結晶ができて不思議なほどの状況に種が投げ込まれたといえるものだったのでしよう。市民、学生が共通に集うゆるやかなネットワークとして、しなやかな活動を都留のまちづくりにもちこみ活気を与えています。マルシンストア向かいの鶴水公園を再生させるワークシヨップ、田原の滝に鯉のぼりを泳がせる「こいのぼり祭り」(写真参照)、さらには「地域通貨サミット」で都留の企画・実行などに、学生たちが関わってきています。

そうした、市民によるまちづくり活動をもっと活発にしているこうと、昨年三月、「都留市市民活動推進条例」が制定されました。七月には、市民活動グループの情報拠点、活動の場として、市役所に近い国道沿いに「まちづくり市民活動支援センター」がオープンしました。今年(二〇〇四年)に入ってから情報は情報化の時代に対応した仕組みとして「ハートフルネット都留」(<http://heart.city.isuruyamanashi.jp/opacity/public/>)というシステムも導入されました。一度、のぞいてみてください。

私は市民活動推進条例案をとりまとめる「懇話会」の会長として、現在は条例に基づいて設けられている「市民活動推進委員会」委員長として、すこしだけですが、市民活動の「基盤整備」を進める過程に関わってきました。きっかけは、私が担当する地域経済論ゼ



毎年5月に都留市田原の滝で行われる「こいのぼり祭り」
写真：保原樹(本学社会学科卒業生)

ミに地域での活動に興味をもち熱心にとりくんできた学生たちがおり、かれらに促されたという以上ではありませんが、担当する市役所職員の方々ばかりでなくまちづくり活動にかかわる市民の方々とも交流するなかで、大学にかかる期待の大きさを感じてきました。たんに、若い世代の学生たちがまとまった数、都留にいるというだけではなく、全国から集まる多様性に大きな期待がかけられているようです。土と風、まちづくりではよく用いられる比喩ですが、よそ者や若者は、見慣れていて気がつきにくい地域の価値再発見におおなる触媒としても期待されているわけです。

地域社会の一員としての大学に向けて

大学に視点を移してみると、大学の教育機能をどのように時代の変化のなかで再活性化していくかということで、地域との交流・連携が課題になっています。文部科学省がはじめた「特色ある大学教育支援プログラム」でも、「大学と地域・社会との連携」というテーマが設けられています。大学のカリキュラムでは対応しきれない実践的な問題解決力の育成、つまり、「現実の社会に生じているさまざまなこと」がら問題をとしてつかみ、解決のための資源をどのように見だし、人々のつながりを通して活かしていくか」という課題は、地域社会の教育力を活かす以外にはないでしょう。現場を学びの場として開拓していくことが大学にとって大きな課題になると思います。

全国から学生を集め、大部分の学生が大学周辺に下宿するという都留文科大学の特徴を个性的な「特長」に変えるには、地域における「学識経験者」として呼ばれるのを待っているというのではなく、学生たちが地域社会の一員として暮らしの中で多くを学ぶことができるよう、地域社会の教育力を高めていくことを大学が自覚的に求めることが必要だと思えます。今年度から地域交流研究センターのプロジェクトの一つとして、地域における学生の自主的な活動を持続的なものにするためにどのような支援が必要か、実際の活動を支えるなかでシステム作りを考えようという趣旨のプロジェクトを立ち上げました。都留の教員でいることが楽しくなるよう、すすめていきたいと思っています。

* 現・立教大学大学院二世紀社会デザイン研究科教授

緑で都市を浸食し、「都留の森」をつくろう

まちの格をあげる手っ取り早い4つの方法

前田昭彦

二〇〇四年一月に都留文科大学前駅が開設され、あわせて行われている区画整理もまもなく完了する。この先のまちづくりへの期待は大きい。大学としても「提言」をまとめ、今年二月に市をはじめ関係団体に申し入れた。プレイス・メイキング(場の個性づくり)のきっかけになるコンセプト(も)となる考え)をもちこんだつもりだが、いささかとつきづら(提言全文やこの間の経過は学報九三号に掲載)。ここでは、もう少しわかりやすい話をしたい。ずばり、まちの格をあげるインスタント・メニューである。

日本のまちを良くする三つの方法

私は現在学外研究中で、日本の都市

計画コンサルタントの草分けの一人水口俊典芝浦工大教授についている。先日、水口さんとの雑談で次のような話題がでた。日本のまちなみを手っ取り早く良くする方法は三つある。(一)緑を育て視界に入るようにする、(二)電柱をなくす、(三)屋外広告物に遠慮してもらう。

常々「情けない」「絵にならない」と言われるまちなみも、適度に緑を配置して建築をかくすと、視覚上格段に美しくなる。そして緑が良く育つというのは、実は日本の特殊性であり、個性である。というのは、ヨーロッパに比べると日本の緑の生命力は格段に強いから。

逆に言うとだからこそ、欧米では緑が都市の中で大切にされてきたが、日本では伝統的に「都市レベル」ではどちらかというと軽視されてきた(「庭先」レベルでは別)。日本の都市の共通の課題は、この緑の力を意識的に都市づくりに活かすことなのである。

今回の提言の中でも、以上のことは「自然と人間活動の新しい出会いと共存を提案するまち」として二番目のコンセプトとして強調している。関係者との会談の中では「まわり中、緑なのにあえて駅前で緑化を強調する必要があるのか」という声もあったが、そうではない。文大の場合、両側の山から緑でまちを浸食し「都留の森」にしてしまうことこそが、すばらしい個人的

なまちづくりなのだ。

(二)電柱については、駅から天神通に抜ける主要道路のみ地中化されることになっていく。さらに全地域、地中化を期待したい。今年から国土交通省は大枚はたいて、電柱の地中化に取り組むことにしているから、明らかに追い風である。

(三)はさておき、私なりにもう少し付け加えると、(四)塀や垣根はつぐらならない。どうしても必要なら生け垣か、視線の通るものとする。近年の住宅開発の流行に、道路側に塀をいつつぐらえず、表札をつけるブレードを一枚たてる(写真)。隣地境界も塀は

つぐらなないか、つくっても目立たないものにする。死角をつくる塀は防犯上も逆効果で、景観も壊す。金をかけるだけ大損だ。

ポイントは「通りとの関係をつくる」ことを各敷地が意識すること。美男・美女はつぐられるというが、それは、彼/彼女が「見られる」ことを意識しているからである。「見られる」から、意識的に美しくしようとすると、するとさらに見られる。こうした好循環が美を生み出す。まちも同じだ。

まえだあきひこ 本学社会科学科教員



街路に向かって語りかける私的領域(谷村町)

地域の声

voice

学ぶということ

都留文科大学と県立桂高等学校との交流について

猪俣春彦

昨年度と同じく、県立桂高等学校では、都留文科大学との交流が活発に行われています。平成一五年度は、大学教員による講演（五回）、文大生による夏休み学習会、桂高生徒会と文大学生会との交流、文大生による部活指導などがありました。ここでは、これまでの交流によって得られた生徒の「学び」について考えてみたいと思います。

そこにあるものに興味をもつ
学校での「学び」では、そのなかの観念的な面が強調される傾向にあります。頭で理解しよ



山本芳美講師による講演(写真:猪俣春彦)

うとすることが多すぎるのです。しかし、今泉吉晴先生の自然観察会を体験した男子生徒は「教科書に載っていない、道端に生えている草を自分の力で育てるということに興味を持ちました。自分のなかのセレンディピティー*に出会える、それがすばらしいと思った」と感想を述べています。「学び」が本や先生の説明だけにではなく、自分の生活自身に、現実的な実像として存在することに気付いたのです。

ことは、豊かな「学び」の原点になるものと思います。大学との交流では、多くの生徒がこれに気付きました。もっとも、桂高校にとっては「交流することそのもの」がこの原点に通ずるものだと感じています。高校生にとつて大学との交流は、本当の「学び」の姿をじっくりと考えるよい機会になったと考えています。

青年期のころ

身近なものから学び、これを理解することは、ちがう場所の自然や文化を理解する入り口になります。山本芳美先生の講演後に、ある女子生徒はこう感想を書いていきます。

「私は、山梨のことを好きではありません。将来山梨県から出たいと思っています。そんななか、（先生から）BEGIN**の話を聞いて、いつかは私もそんな時（故郷を理解する時）がくるのかなあと、興味を持ちました。」

「そこにあるものを面白がる」
ことができたなら、次は「どこかにある面白いもの」を発見し

に行きたくなると思います。この生徒のように、身の回りにある現実はあまりにも生々しく強烈であるために、今はその厳しさだけが意識されているけれど、外の世界に飛び出して広く学ぶことで、改めて故郷を客観的に捉えられる自分ができることを予感することもあります。また、他の女子生徒は、「セレンディピティーから自分の世界が広がっていく。体験しなければ分からないこともある。正直になることが大切なのかなと思った。セレンディピティーとは、自分の心の中を表しているのかなと思った。」と書いていますが、「どこかで何か」を学びたいという意欲とともに、自己の確立をめざす気持ちが芽生えていくものと思います。大学との交流は、生徒の心に「学び」のためのしっかりとした根を形づくると、いい機会になっているのです。

*偶然のなかに価値を見いだす感性
**ピギン・沖縄県石垣島出身のトリオ・アコースティック楽器中心の編成で、ブルースやウエスタン・スウィングなどを島唄的に聴かせる

いのもたはるひこ
山梨県立桂高等学校教員

「第三回未来館IT講座」の開催にあたって

小林高

都留市情報未来館は、平成一二年八月に、市内の行政機関や教育機関を光ケーブル専用線で結ぶブロードバンドネットワーク「都留市地域イントラネット」の拠点施設として開設された地域の情報発進基地です。

情報未来館はまた、「創造の喜びと学ぶ楽しさを見つけてよう」をキャッチフレーズに、市民の要望に応じた魅力ある施設にと、運営には公募や企業からの応募による多数の市民ボランティアの方々による専門的な支援を依頼し、内容の充実とその振興に努めています。

今年度のおもな活動としては、小・中学生対象の「ジュニアパソコンクラブ」や中高生対象の「いきいきパソコンクラブ」の開催、エクセルやワード、デジカメ活用、暑中見舞いや年賀状作成などの各種パソコン教室の実施、さらには、「情報未来

自分と出会う ——世界と出会う

分田 順子

桂高校の1年生に「自己の発見と将来の自己形成」というテーマで、話をしたいという依頼があったのは、昨年のクリスマスを前にした頃でした。正直いってお受けしたものかどうか大いに躊躇ためらわれました。同時に、自分の研究課題について学会や研究仲間を相手に語る方がよほど気楽だ、とも思いました。専門家同士であれば、私がなぜ北アイルランドにそれほどの関心を寄せるかに関する話を捨象しやしょうし、本題（たとえば和平プロセスと市民社会）について語れば済むからでした。しかし、今回求められているのは、「私と世界との出会い」、つまり迷いと躓つまずきに満ちた研究者としての個人史だということが察知されました。私はこの機会を「クリスマスの試練」と受けとめ、私にとって原野も同然だった北アイルランドを、自分なりの方法で耕し始め、そこが自分のフィールドと呼べるようになるまでの試行錯誤をお話することになりました。

人にはその人なりに気になってたまらない世界があるはず。そこにどうやって分け入るのかという課題は、職業探求の出発点にたつ高校生も、仕切り直しを迫られた研究者も同じでしょう。私の場合、もう10年ほど前のことですが、漠として見えなかった北アイルランド社会の内奥ないおうが、そこに暮す人々のモノローグに耳を傾けることで、まるで篝火かがりびで照らしたように見えるようになりました。同時に私は、真情に溢れることばに感応する「それまで知らなかった自分」を発見した思いでした。振り返ってみると、私はそこで自分と出会い直し、それを通じて世界と出会い直していたのでしょ。期せずして高校生を前に私自身のモノローグを吐露する結果となった訳ですが、彼らが自分自身と出会い、そこから歩み始めるきっかけになったとしたら幸いです。

ぶんだしゅんこ
本学比較文化学科 教員

桂高校で講演する分田順子教授(写真:猪俣晴彦)



館「IT講座」や「初心者パソコンなんでも相談」などを開催しています。そのねらいは、二一世紀を生きる市民の創造力や探究心を育む情報教育の環境づくりと、世代間の交流にあります。

都留文科大大学へ桂高校へ
情報未来館をつなぐ

さて、今年で三回を数える「情報未来館IT講座」とは、前述した「都留市地域イントラネット」を活用したテレビ会議システムによる多地点遠隔講座

です。今回は、二月六日(金)、講師に都留文科大大学の寺田良一氏(環境社会学)*をお迎えして、「どう減らす環境リスク、どう創る環境社会へあなたができること、すべきこと」と題し、オゾン層の破壊や環境ホルモン、携帯電話と電磁波の関係など私たちの身のまわりに起きている興味ある、しかも深刻な環境リスクについての講義をしていただきました。都留文科大をメイン会場に、桂高校と情報未来館をサテライト会場とし

て、それぞれの会場には谷村工業高校や桂高校および都留一中の生徒のみならず、市民や大学生など約一五〇名が参加し、大型スクリーンでテレビ会議システムを体験しながら大学の講義を聴く機会を持つことができました。

今回の情報未来館を核とした大学と中学校・高等学校および市民の方々の連携は、地域の特性、すなわち、都留市ならではの教育環境と情報環境を活かした、市民の知的好奇心や満足

度を一層高めるより高度な住民サービス実現への効果的な試みの一つです。さらには、次代を担う子どもたちにとっても、学習意欲や進路意識の向上、今後の「生き方・在り方」など多方面にわたり有意義な影響を与えるものと考えています。

これからも、都留文科大が地域交流研究センターを中心に、「地域の大学」としてより積極的に地域と向き合うことを大いに期待したいとおもいます。

*現在は明治大学文学部教授

こばやし たかし
都留市情報未来館館長



topics トピックス

家具リサイクル

日向良和

平成一六年一月、新図書館が完成し大学に引き渡されました。旧図書館の開館が昭和五二年なのでそれから二七年目のこととなります。

旧図書館には開館より代々の都留大生が使用してきた多数の家具、備品がありました。これらの物品について学内、市役所

内での再利用および市民への公募による無償譲渡が計画されました。

大学内、市役所各課、市内小中学校、都留市立図書館などに順次移管していき、さらに一般向けの無償譲渡会を三月一四日におこないました(参加者八二名)。譲渡会の結果、ほとんどの物品について譲渡者が決定しました。

移管・譲渡の結果、廃棄物の量を削減し、資源の有効活用をおこなうことができ、また廃棄費用を大幅に削減することができました。

譲渡先での利用状況

譲渡先での利用状況ですが、まず市内小中学校では、低書架が図書室などにおいてふたたび書架として児童生徒に利用されています。

一般向けに無償譲渡された家具、備品はさまざまな団体、個人がさまざまな利用をおこなっています。あるボランティア団体では雑誌架を子ども用のくつ箱として利用し、パン屋さんに譲渡された木製書架は、パン種を寝かす棚として利用されるそう

です。譲渡された団体も新町自治会をはじめ、ボランティア団体、個人、市内企業など多岐にわたっています。これまで二七年間学生の学習研究を支えてきたこれらの家具・備品は、これからも長く都留市民のために働いていくでしょう。

ひなたよしかず
本学図書館司書

「在宅ケアを支える会」の活動

小石沢栄子

会は、平成八年にスタートし、「在宅ケア推進プロジェクト会議」(厚生省のモデル事業)に始まりました。目的は在宅療養者および家族に対する支援体制づくりですが、「高齢者の介護問題を単に行政の問題や一族の問題とするのではなく、市民も自分たちの問題としてとらえ、地域でどう支えていくか検討すること」を目指してモデル事業を展開しました。終了した後にも会議は継続されました。行政と市民とが協働し、「在宅療養者が安心して暮らせるまち」

をキーワードに課題を出し合い、提言をし、実践活動を展開してきました。

都留文科大学の先生に助言をいただき、興味のある学生には同じスタッフとして若いパワーと柔軟な発想で活動に参加していただいています。そもそも協働作業になれていない住民と行政が作り上げていくまちづくりは、試行錯誤の連続です。

都留市のよいところをのばし、小さな活動に丁寧な光を当てていく地域の活動を実践していこうと、話相手を求めている高齢者宅への訪問活動をしたり、また高齢者の地域での交流の場づくりをしようと、気楽に



都留市戸沢での「いきいきサロン」の様子(写真:小石沢栄子)

集まってお茶のみのできる「ふれあい・いきいきサロン」の開催を社会福祉協議会とともに応援したりしています。同時に介護保険制度について、よりよい制度になるよう都留市の現状を捉えながら学習しています。

一つ一つの活動をおして先が見えてくる、そんな地道な活動を「楽しみながら」これからも続けていきたいと思っています。興味のある方はいつでも大歓迎です。気負わず、できることから始めてみませんか。

こいしざわえいこ
在宅ケアを支える会世話人





講演をする大江健三郎氏

大江健三郎氏の記念講演 に寄せて

「あなたは、
忘れるために
本を読んで
いるのか？」

山崎 巨

大江さんは子どもの頃、公民館の本を全部読んだことを母親に伝えました。すると、それらの本にはどういことが書かれているのか、とたずねられたそうです。しかし大江さんは答えることができませんでした。あなたは忘れるために本を読んでいるのか、と母親から言われてしまいます。ユーモアのあるお話でしたが、このことは大変

重要だと思いました。私も経験してきたことですが、一冊の本を読み終わって、誰かからどんな本なのかとたずねられた時、その内容を自分の言葉で明瞭に話すことはむずかしい。せいぜい「おもしろかったよ」と言うのが関の山です。私は実際のところ本当に読んでいなかったのではないかと不安になります。大江さんは講演の中で、本を読んでもそのまとめをノートに書くことを勧めていらつしやいました。私はこのことを、大江さんがおっしゃっていた「自分を明瞭に表現する」ためだけではなく、本を本当に読むために必要だと感じました。また講演の後に大江さんに伺ったことですが、大江さんは子供の頃から、赤鉛筆で大切だと思つたと

ころに傍線を引きながら、ゆっくりと注意深く本を読むように心掛けていたそうです。そのことよって注意した部分を二度読むことになり、難しいところも少しずつ理解できるようになる。また、本を読みながら気になった前の箇所を、赤線をたよりにすぐ見つけ出し、再度読むことで理解への忍耐力も培われるということ。なんと能動的な読み方ではないでしょうか。能動的な読みとは、本を単に情報としてやり過ごすのではなく、意識を集中し、はつきりと心に刻み込むようにして読むことだと思えます。そのようにしてはじめて、本が読む者の意識の中に実在するようになる。本との本当の出会いとはそのようなものではないでしょうか。「本を、忘れるためには読まないぞ」……これから本を読む時の私の一つの決心です。

やまさきわたる
本学国文学科四年

(都留文科大学創立五〇周年記念講演が、二〇〇四年四月一七日に都留市うぐいすホールで行われました。)

読者の声

■『『地域交流センター通信』を郵送いただき、ありがとうございます。地域、行政、大学のつながりは、これからますます必要になるのではないかと感じています。それを実践する大きな一歩を踏み出したと思います。私の目から見ても、この地域の子どもたち、先生方、親、が問題をかかえているように見えます。たとえば、人とのコミュニケーションの基本は挨拶からだといは考えますが、それができない。子どもも親も、先生も、挨拶されてもそれを返すことができない方が多いのです。子ども、大人、関係なく、人とのかわりあいの不得手さが目立ちます。(中略)先生方も、きつとそれぞれに問題を携えているのでしょう。そのSOSを聞く機会、機関をつくつたというのは、とても心強いことだと思えます。

子どもは、生徒は、思いの他よく大人を観察しています。私がそうだったように思います。本能的に、その先生の生徒に対する考え方や生活態度などとおして、自分を受け止めてくれる技量があるかどうかを、確かめているように思えます。合併号にある(カンファレンス)は、子どもと先生との心の距離を近づける大きなてがかりになると感じます。

他の取り組みすべても、感心させられる内容ばかりでした。このような取り組みが自分の地域にもあったら、どんなに良いだろうと思います。(中略)都留文大は前進していますね！すごい！(足立恵氏・本学卒業生、長野県在住)

■『『地域交流センター通信』をお送り下さり、ありがとうございます。大学として地域にねぎすことの、新しい貴重な試みとして学ばせてもらっています。それと、全体に写真(レイアウト)がすばらしい。』(大田政男氏・大東文化大学教授)



編集後記

○今泉センター長は、巻頭文で「地域交流研究センターは、ソローの大学のように」と述べています。地域交流センターの思想がいよいよくっきりとしてきました。

○第5号は、学生を中心とした地域活動ということで特集を組みました。「うら山観察会」は、すでに15年の歴史をもっていますが、それを支える地域の人たちとのふかい交流があります。また、学生たちによるまちづくりのとりくみは、自主的なものとして営まれています。地域住民とのあたらしい交流を生みだしつつあります。地域交流研究センターは、こうした経験がもつ価値をさぐり共有化していくこと、また大学の研究・教育との連絡を見出していくこと、などを目指しています。

○次号は、「つる子どもまつり」を特集します。学生たちと市民とが手をとりあいながら35年の歴史を刻んできました。おそらく、全国的にみても希有なものといえるでしょう。

○2年目に入る地域交流研究センターは、あたらしい組織・陣容をもって動いています。「地域交流センター全体会議」は、総勢14名の教員で構成されています。

○この通信を、大学と市民との共有物となるように育てていきたいとおもいます。高校生も大切な読者として想定しています。広く、ご意見や感想をお寄せください。

(編集長 畑潤)

センター掲示板

都留文科大学と桂高校との研究交流を開催

8月4日の午後、山梨県立桂高校において研究会(研修会)を開催する準備をすすめています。「生徒指導」をテーマに、実践レポートにもとづき桂高校教員と都留文科大学教員(複数)とが合同で研究しようとするものです。青年期教育の事実を共同で検討しながら、高等学校の先生方の実践と、都留文科大学における大学教育実践・研究とを深めていく何らかのヒントを見出していこうとしています。

表紙写真:
フィールド・ミュージアムの学芸員(4頁に関連記事)の一人、清水貞一さんと水掛菜の種とりワークショップの様子(2004年6月12日)。水掛菜は、豊富な湧き水を利用した都留の代表的な農作物。撮影、北垣憲仁。

(DTP制作アシスタント: 清水亮)